

同音語の用法

—『温かい』と『暖かい』—

吉 村 弓 子

一 はじめに

日本語には数多くの同音語があり、それが意志疎通の支障になっていると言われる。本稿では、まず、同音語とは、どのような現象を指しているのかを概観する。つぎに、一例として、「温かい」と「暖かい」の使い分けについて調査したものを紹介し、同音語の用法を考察する。

二 同音語とは

二・一 表記と発音と意味

同音語と並んで、同形語、同音異義語、同形異義語、異形同音異義語という用語が使われるが、その定義は厳密とはいえない。ある用語を広義に用いて、他のものを下位分類に含めることもあれば、狭義に用いて、他のものと同位の分類として並列に扱うこともある。同じ内容のことに当てる用語が著者によって違うこともある。その上に、著者が明確な定義を掲げていないために、読み手は例を見ることによって、帰納的に定義を推測せざるを得ない、という場

合も決して少なくはない。用語の不統一は日本語に限ったことではなく、*homonym*, *homophone*, *homograph* などの英語を使った説明にも、同様に見られる。

本稿では、これらの用語を、あえて定義づけず、表記(形)・発音(音)・意味(義)を考えながら、同音語を説明していく。

同音語というからには、発音が同一であるのは当然のことだが、アクセントは考慮に入れないから、「鼻」と「花」、「端」と「橋」も同音語になる。

ここで注意しなければならないのは、日本語の漢字には、音と訓という二通りの読みがあるということである。つまり、先の例は、訓で「はな」「はし」と読むときに限り、同音語なのであって、音で「ピ」「カ」「タン」「キョウ」と読むときは、もはや同音語ではなくなっている。本稿副題も、「温かい」「暖かい」の漢字を「オン」「ダン」と読めば、同音語ではなくなる。「シリツ」には「市立」と「私立」とがあって、「いちリツ」「わたくしリツ」と区別するといふのは、あまりに有名な例であるが、これは漢字の音訓を巧みに利用しているわけである。

英語では、一語に体系の異なる音が対応することは、ほとんどないから、ある一組の語が同音語か否かは自動的に決ってしまう、と言って良い。

〈同音〉

{はな(鼻)
はな(花)}

{bear [beər] (熊)
bear [beər] (耐える)}

{ヒ(鼻)
カ(花)}

{bow [bəʊ] (弓)
bow [bəʊ] (おしぎする)}

〈異音〉

同音語の表記は同じ場合と異なる場合がある。英語の同音語は二分することができるが、日本語は任意の同音語を仮名で書けば同表記になり、漢字で書けば異表記になる。これは、現代日本語が漢字と仮名(ひらがな・カタカナ)という、複数の文字列を用いていることに由来する。前述の音と訓について言及するなら、漢字は読みを指定しないが仮名は読みを指定する、ということになる。

〈同表記同音〉

{はな・ハナ
はな・ハナ}

{bear [beər] (熊)
bear [beər] (耐える)}

{鼻
花}

{knight [naɪt] (騎士)
knight [naɪt] (夜)}

〈異表記同音〉

英語でも日本語でも、表記が同じで発音が違う語というのがある。しかし、これは同音語ではないから、ここで深入りせず、隣接した現象として、その存在を記すだけに、とどめておく。

同音語の表記が同じにしろ異なるにしろ、意味の距離には、さまざまな程度がある。その程度は本来、連続しているものであり、段階的ではない。が、便宜上、意味が大きくかけ離れているものを異

義語、近いものを類義語、全く同じものを同義語、と三分類にすることが多い。参考までに、国研報告20「同音語の研究」の分類例を記載する。

同音異義語

化学—科学 協調—強調 古人—故人
低調—丁重 訳者—役者 向学—後学
暗に—案に 強行—強硬 良好—良港

同音類義語

定跡—定石 経理—計理 定年—停年
移動—異動 作成—作製 生育—成育
足形—足型 雄姿—勇姿 共同—協同

同音同義語

重態—重体 容態—様体 広野—曠野

二・二 同音語の意味距離に関わる問題

同音異義語という用語はよく耳にするが、同音類義語、同音同義語は、あまり聞かない。これは、同音語のすべてがすべて、意志の疎通に支障となるわけではないことを反映している。意味が、あまり離れていても紛れようがないかもしれないが、近くなればなるほど、紛れても大して困らなくなり、同義ともなれば、全く問題にはならない。意味が異なるからこそ誤解が大きくなる、というわけである。

ところが、同音語を異義語、類義語、同義語と分けることは、実は単純明快にはいかない。たとえば、「長い—永い」は、どれに入るだろうか。議論を具体的にするために、文脈を与えてみよう。筆者の直観では、「ながい髪の毛」、「手がながい」には「長い」

が、「ながい眠りに就く」、「ながの別れ」には「永い」が、明らかに適合する。しかし、「ながい夜」、「ながながと話す」には「長い」でも「永い」でも構わないのではないかと思える。

ここで問題になることが二点ある。まず、それぞれの文脈に「長い」と「永い」のどちらを当てるかに、個人差がある。つぎに、同じ様に使いわけるとしても、その事実の解釈が一通りでない。つまり、「長い」と「永い」は意味の守備範囲が違ふと考えるか、使い分けは表面だけで、つきつめていけば、共通の意味要素をもっていると考えるか、ということである。

第一の点は、年齢、性別、教養、職業などに依存しているらしい⁽⁴⁾が、その関係を解明したといえる研究は、筆者の知る限りにおいては、まだ無い。

第二の点は、別語の同音なのか、同語の多義なのか、という問題である。この問題が難解なのは、歴史的事実と現代人の使用意識にズレが生じるからである。辞書の編纂者は、見出しを一つにするか別に立てるか、頭を悩ます。英語でも同じことが起こっているが、日本語の場合、漢字の違いがしばしば別語意識を支える、ということが特徴となっている⁽⁵⁾。

ことに、訓読みの同音語において、この傾向は顕著である。元来、和語は一語で大まかな意味を表わしたが、漢語の一語は細分化された意味をもっていた。そこで、和語と漢語は一对一に対応できず、複数の漢語(漢字)に一つの和語(訓)を当てて、日本語に取り入れた。漢字使用の影響で、日本語としても意味が細分化して別語になったものと、漢字表記は何通りかあっても、いまだに一語としか意識されないものがある、というのが現状であろう。

しかし、現状とは別に、「……であらねばならない。」と唱える、○主義者が存することも、また事実である。国粋主義者は、大和言葉は大らかな意味をもつものであり、漢字で区別しようとすること自体、間違っていると言う。漢学尊重主義者は、漢字には一字一字に意味があり、それを重んじて、文脈に即し用いなければならぬと言ふ。前者においては、同訓異義語は歴史的に同語源ではない、偶然の一致の場合であり、後者においては、漢字表記が異なる以上、同訓同義語も同音同義語もありえないことになる⁽⁶⁾。

二・三 周辺的な同音語

同音語は字音語同士か字訓語同士が、形態素レベルで成立することが多いが、「同音語の研究」には次のような例がある。

固有名詞を含むもの

茨木―茨城 同志社―同志者

略語を含むもの

民放―民法 参院―産院 農工―農耕

複合語を含むもの

機関紙―季刊誌 起源説―紀元節

活用形を含むもの

行こう―移行 買った―勝った

外来語を含むもの

ソーセージ―早生児 罐 can

プロ(program)―プロ(professional)

誤読を含むもの

文学―文楽 精神―精進 格子―小牛

(1) ごくわずかの語には、ラテン語読みと英語読みとの二通りがある。たとえば、*トウ* はイド・エストとザット・イズ、*セウ* はエクゼンブライ・グレーションヤとフォー・イグザンプル。ただし、ラテン語読みは古典語の素養を必要とし、一般大衆の意識として、二通りの読みが並存するわけではない。そこが、日本語の音訓と違う点である。これに關しては文献18に詳しい説明がある。

(2) イギリス英語とアメリカ英語の違いは取り扱わない。

(3) 意味がかけ離れていても一方の語を知らないときは、同音の知っている語に結びつけることが文献21に見られる。

(4) 文献5・6に調査結果がある。

(5) 日本語以外の綴り字について、同音語判別機能を疑っているのが文献1・4・21で、肯定的なのが文献3・9である。

(6) 文筆家も漢字のもつ微妙なニュアンスを大事にすることが多い。

漢字が違えば別語か、という問題は、文字は言語の内にあるのか外にあるのか、という議論に発展し、文献12に詳しい。

三 「温かい」「暖かい」の使い分け意識

三・一 異字同訓に対する文部省の方針

二、一の説明に則して言う、「温かい」と「暖かい」は訓読みの場合に同音語となる和語であり、仮名を使えば同表記、漢字を使えば異表記になる。意味がかなり近接しており、同語か別語かの問題をひき起こすことは二・二で取りあげた。

漢字が異なり、訓読が同じであることから、これらの同音語を異字同訓と呼ぶことがある。調査の背景として、文部省が異字同訓をどのように扱っているか以下に述べる。

昭和三年の当用漢字音訓表では、異字同訓を最小限にとどめて

いたが、四八年の改定音訓表では、「漢字の使い分けのできるもの、および漢字で書く習慣の強いものは取り上げる」ことにして、二七一の訓を追加した。「温かい」はその一つである。音訓表備考欄に掲がった異字同訓を数えると二四七字あり⁽⁷⁾、当用漢字一八五〇字のうち一三・四%を占める。音訓表例欄には使用例が掲げてあり、品詞を異にする派生形や自動詞・他動詞の対応形に至るまで、同じ漢字を適用できることが具体的に示してある。

三・二 「温かい」「暖かい」の頻度

同音語の混乱には語の使用頻度も影響し、高頻度語の方が支障になると一般に認められる⁽⁸⁾。そこで、「温かい」「暖かい」についても、頻度を確認しておく。

「現代新聞の漢字」によると、「暖かい」の使用度は、派生形や対応形を含めて五二で、字訓形容詞、形容動詞の中で六一位である。「温かい」の使用度は三で、順位は七七位内に入っていない。しかし、「婦人雑誌の用語」を見ると、「暖かい」の例はなく「温かい」の例だけが出ている。

三・三 「温かい」「暖かい」の読みと意味の問題

「温かい―暖かい」を「あたたかい」と読むことには、異論はないだろう。派生形、対応形を検討すると、「暖かい」の方は問題ないが、「温かい」の方は困る場合がある。送り仮名を「温い」とすると「ぬるい」と読める。「温まる」は「ぬくまる」⁽⁹⁾、「温める」は「ぬくめる」とも読めるのである。

意味については、国広(一九六七)に詳しい分析がある。これによると、「アタタカイ」の他、「アツイ」「サマイ」「スズシイ」「ツメタイ」など、温度を表わす一連の語は、「アツイーサマイ」、「ア

ツイーツメタイ」の二系統に分けられる。そして、前者は「暑イ」、後者は「熱イ」として区別できる。「アタタカイ」は「暑イーサムイ」の中間と、「熱イーツメタイ」の中間と双方に位置する。その表記はいずれも「アタタカイ」となっており、「温かい」と「暖かい」で区別できるかどうかという議論は、されていない。

なお、国広は、意義素分析に際して、比喩的な用法や共感的な用法は別扱いにしているので、この分析は温度そのものを表わす用法だけに關したものである。しかし、国語審議会漢字部会による『異字同訓』の漢字の用法」には、「暖かい心」「友情を温める」など、比喩的用法も掲がっているから、国広の分析をそのまま適用して考えるわけにはいかない。

漢字の音訓両用性を利用して、「暖色」から「暖かい色」を類推することは、一見有効のようである。しかし、辞書には「温色」も載っている。さらに、SUZUKI(一九六三)によると、「寒流」は「冷たい潮の流れ」であって「寒い潮の流れ」ではないように、音訓が対応しないこともある。また、「寒」と「冷」は音読みの使い分け基準と訓読みの使い分け基準が異なる、とも言う。このように、音読みの熟語から訓読みの用法を安易に類推することは危険である。

三・四 調査の方法

このように、いくつかの問題をはらんでいる同音語「温かいー暖かい」の使い分けとして用例を示したものがあ。これらが現代日本語の使用者意識と一致するかどうか、調べてみた。

調査に使った用例の出典は、武部良明「漢字の用法」、「三省堂国語大辞典」、国語審議会漢字部会『異字同訓』の漢字の用法」であ

る。「温かい」は「温かい風呂」「温かい料理」「体が温かくなる」「人情が温かい」「温かい扱い」「温かく迎える」「家庭の温かみ」「水が温まる」「心温まる話」「体を温める」「旧交を温める」「温かい家庭」の二例、「暖かい」は、「暖かい気候」「暖かい国」「暖かい日」「暖かい色」「布団の暖かみ」「ふとところが暖かい」「室内が暖まる」「暖まった空気」「席の暖まる暇もない」「手足を暖める」「暖かい心」「暖かな毛布」「暖かい冬」「暖かい気持ち」の一四例である。二か所ほど手を加えてあり、「手足を暖める」は「手足を暖めてやる」、「ふとところが暖かい」は、「懐が暖かい」が原文である。

調査は三種類試みた。

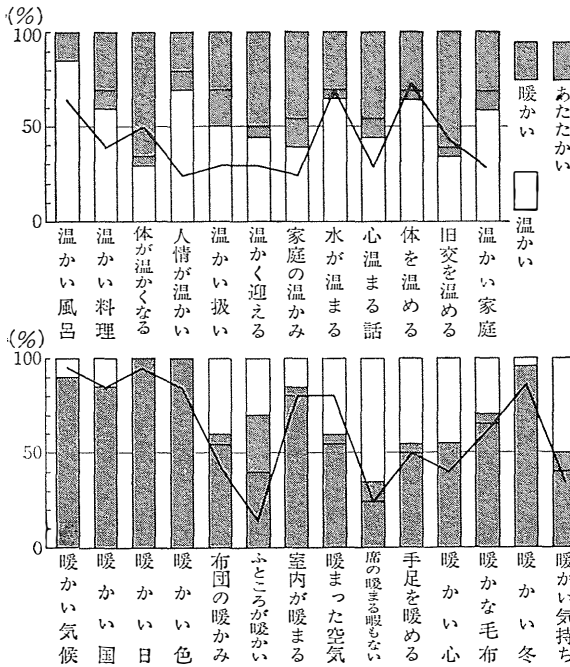
A 用例を無作為に並べ、「温」「暖」のある文節は括弧の上に小さく仮名書きしておく。調査用紙を配布し、括弧内に適当な文字を入れさせる。

B 用例を「温」「暖」別にまとめた一覧表を作成して配布し、辞書にある使用例であることを告げたうえで、各用法に対する賛否を○×で答えさせる。さらに、この表における「温」と

「暖」の使い分けの基準を判断させ、表の下の余白に書かせる。
C 各用法を「温」「暖」二通りに表記したものを準備し、それぞれ自然か不自然か、どちらを使うか、二つは意味が同じか違うか、意味微分法を用いて五段階評価をさせる。さらに、意味が同じでないなら、どこがどのように違うのか、自由に記述させる。

被験者は、国際基督教大学教養学部生、八〇名である。全員、日本語を母語とし、海外経験は三年未満である。調査毎の男女内分けは次の通りである。

- A 男八 女二二 計二〇
- B 男八 女二二 計二〇
- C 男七 女三一 不明二 計四〇



調査Cが調査AおよびBの二倍の被験者を必要としたのは、調査時間を短くするために二六の用例を二分したからである。被験者はその一方にしか参加していない。また、全調査を通じて二種以上の調査を受けた被験者は一人もなく、異なり人数が八〇名である。

調査は一九八〇年一月から二月にかけて、国際基督教大学の教室

において、口頭の指示で行なった。

三・五 調査の結果と考察

図一は、調査Aの結果を棒グラフで、調査Bの結果を折線グラフで示したものである。調査Aは送り仮名の異なる回答も含めて集計してある。「温かい風呂」「暖かい気候」は代表形と考えてもよい。

調査Bの結果は、使用例に賛成した比率を表わしている。

調査Aで使用例に一致する回答の比率と、調査Bで使用例に賛成する比率とは、同様の傾向を示す。両結果の違いが統計的に有意（危険率一パーセント内）なのは「人情が温かい」一例である。

最も安定している用例は、「暖かい気候」「暖かい国」「暖かい日」「暖かい色」「暖かい冬」の五例である。これは、カイ二乗検定の結果、調査A・Bともに有意差（危険率一パーセント内）が認められた。調査Aだけを見ると、「温かい風呂」は危険率一パーセント内で、「室内が暖まる」は危険率二パーセント内で、有意差がある。

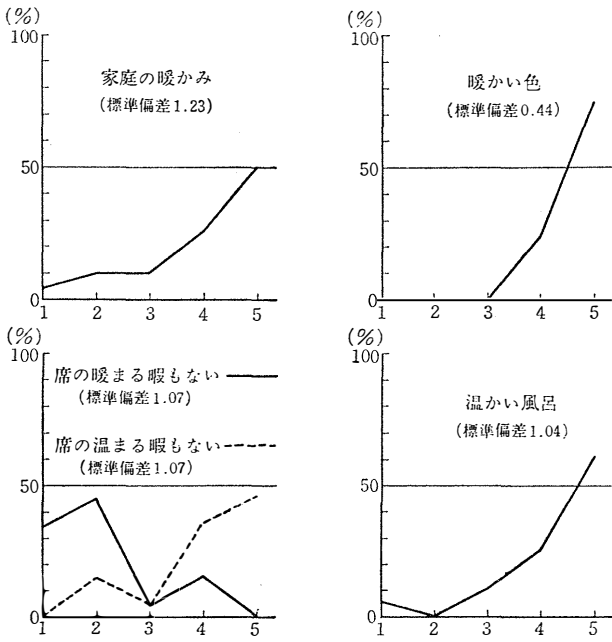
「ふところが暖かい」は、調査Bにおいて賛成率が一五パーセントと、全用例の中で最も低く、統計的にも有意差がある。使用例に反した形で統計的有意差を示すのはこの例だけである。⁽¹¹⁾「家庭の温かみ」「心温まる話」「席の暖まる暇もない」「暖かい気持ち」なども、使用例と一致しない回答が多いようだが、検定の結果では有意差が見られない。したがって、この使用例は適切でないとか、調査Aの結果を見ると「体が暖かくなる」「席の温まる暇もない」の方が多いか判定するのは、科学的ではない。

調査C「自然か不自然か」についての回答は、次のように点数を与えて集計した。非常に自然一五点、どちらかといえば自然一

四点、どちらともいえない・わからない―三点、どちらかといえば不自然―二点、非常に不自然―一点。

二六の用例をそれぞれ「温かい」「暖かい」の二通りに表わしたから、用例は総計五二である。そのうち二二例は、自然―不自然の分布が偶然ではないことが、検定によって明らかになった。顕著な傾向を示すものを図二に掲げる。

図二



使用例通りの用例について自然であると評定されたのは、次の四例である。「温かい風呂」「温かい料理」「体が温かくなる」「水が温まる」「体を温める」「暖かい気候」「暖かい国」「暖かい日」「暖かい色」「暖かい冬」(以上、危険率一パーセント内)。「室内が暖まる」「暖かい心」「暖かな毛布」「暖かい気持ち」(以上、危険率二パーセント内)。調査A・Bで使用例に一致、賛成率の高いことが認められた七例は、全て入っている。

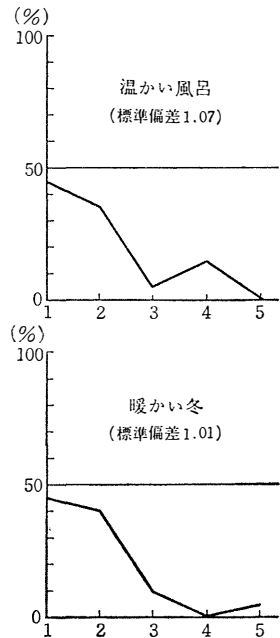
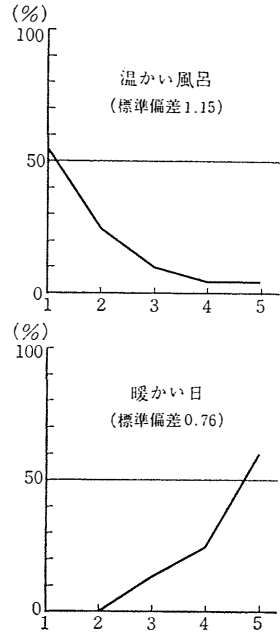
使用例に反した用例について自然であると評定されたのは、次の六例である。「家庭の暖かみ」「席の温まる暇もない」「手足を温める」(以上、危険率一パーセント内)。「暖かく迎える」「暖かい家庭」「温まった空気」(以上、危険率二パーセント内)。

不自然であるという評定を受けたのは唯一、「席の暖まる暇もない」である。「席の温まる暇もない」は自然だと受けとられているから、「席の暖まる暇もない」は、両方で否定されていることになる。

図三は、「温かい」「暖かい」のどちらを使うかについて、著しい偏りを見せた例である。集計方法は先ほどと同様で、暖かいを使う―五点、温かいを使う―一点とした。

分布が統計的に偶然でないといえるのは七例ある。そのうち次の六例は、使用例通りの用法を支持している。「温かい風呂」「水が温まる」「暖かい気候」「暖かい日」「暖かい色」「暖かい冬」(危険率一パーセント内)。「席の暖まる暇もない」は「温まる」の方に分布が偏っている。これは、自然さの評定と同じ結果である。

意味が同じかという問いに対し、明確な傾向を表わしたのは、図四の二例だけである。同じ―五点、違う―一点とした。



調査Bで得た使い分けの基準をまとめると、次の様になる。「温かい」は気温・水温・水に関係があるもの、人が直接関わる心情や心理について用いる。「暖かい」は気候・天候・温度・人情・人間性・感覚的なものについて、実際に体のまわりを全体的に包むような場合に用いる。

この回答から「温かい」と「暖かい」の輪郭をはっきりさせるこ

とは難しい。明確なのは「気候」と「水温」しかない。「気温」は「温度」と、「心情・心理」は「人情・人間性」と重なり合い、一線を画することはできない。

調査Cでは、それぞれの例について「温かい」と「暖かい」の意味の違いを得たので、主な回答を紹介する。

「暖かい気候」「暖かい国」「暖かい日」「暖かい冬」では、「温かい」を使うと温度だけしか表わさないが、「暖かい」を使うと全体の快さまで表わす。気候を意味する場合に適するのは「暖かい」の方で、「温かい国」では国民性を意味する。

温度でも水温となると、「温かい風呂」水が温まる」に見る通り、「温かい」の方がふさわしい。「暖かい風呂」は風呂場全体を表わす。

「体を温める」「手足を温める」という動詞の場合、「温める」は密着した熱源で部分的に具体的に、「暖める」は離れた熱源で全体的に抽象的に加熱することを示す。

比喩的な用法、「温かい扱い」「温かく迎える」では、「温かい」

の方がしみじみとした優しい心情を適確に表わしており、「暖かい」は派手で活発な印象を与える。しかし、「温かい料理」「家庭の温かみ」「室内が暖まる」では、「暖かい」の方に雰囲気や愛情を感じ、「温かい」は物理的な温度しか想像しない。

以上の回答を見ただけでも、判断に矛盾のあることがわかる。一例をとると、「温かい」は温度だけを表わすと言ったり、人情・心情を表現するのに適すると言ったりしている。こういった矛盾は用例に依存する他、個人差が大きい。また個人内でも揺れがあつて、使い分けが一筋縄ではいかないことを示唆している。

(7) 漢字の異なり数をとった。たとえば、「掛」は「かかり」「かかる」「かける」の読みで異字をもつが、一字と教える。

(8) 文献5・6を参照。
具体例は文献8にある。

(10) 意味分析法については文献16参照。ただし、評価は七段階になっている。

(11) 「あたたかい」という回答も多い。「懐」を「ふところ」に変えたことが影響を及ぼしたかもしれない。

四 おわりに

以上見てきたように、同音語の問題は文字の問題であり、かつ、意味の問題である。西欧語とくらべると、日本語の場合は文字の比重が大きい。これは、すでに述べた通り、二系統の表記(漢字と仮名)、二系統の読み(音と訓)をもっているからである。

しかし、「日本語では表記も言語の一部である。」と結論づける前に、より精密な議論を重ね、厳密に説明する必要があると思う。文

字が話し言葉にまで介入し、「いちリツ」「わたくしリツ」と区別したり、「寒い方のカンシン(寒心)」と説明することは事実である。漢字が別語意識を支えている側面も確かであるが、「温かい」「暖かい」に見るように、ある用法に限って区別が明確な同音語も少なくはない。漢字が違えば必ず別語だというわけではない。

文筆家は、漢字の使い分けによって微妙なニュアンスを出そうとするが、その試みは、ひらがな・カタカナにも及ぶことがある。某コピーライターは、「心あたたまる愛の贈り物」というコピーを、「温まる」か「暖まる」か、さんざん迷った末、漢字でイメージを限定したくないと考えて、ひらがなを使った。ここでは、和語と漢語の歴史的な意味範囲の違いが、そのまま影響していると考えられる。ある作家は、女性のことは「あのひと」と書き、「あの人」では感じが出ないと言う。ここでは、ひらがなに特別な意味を見い出している。

日常生活でも同じ問題がある。「ふところがあたたかい」の「あたたかい」は、「暖かい」の意味と同じか、「温かい」「暖かい」両方か、「温かい」「暖かい」とは別の意味をもつか。「温かい」「暖かい」の区別は明瞭でないから、「取る」「撮る」「執る」「盗る」とる」「トル」などを考えれば、問題点が明らかになるう。

日本語が特殊な言語だと言うつもりは毛頭ない。しかし、このような特質を配慮しなければ、日本語の同音語は把握できない。

参考文献

- 1 ブルームフィールド(三宅鴻・日野資純訳)『言語』一九六二年 大修館

- 2 文化庁文化部国語課 『公用文の書き表わし方の基準(★料集)』 一九七七年
 - 3 グリースン(竹林滋・横山一郎共訳) 『記述言語学』 一九六〇年大修館
 - 4 Jespersen, 'Monosyllabism in English', *Linguistica*. 1933 Copenhagen-London.
 - 5 国立国語研究所報告²⁰ 『同音語の研究』 一九六一年
 - 6 ———²¹ 『類義語の研究』 一九六五年
 - 7 ———⁴⁴ 『形容詞の意味・用法の記述的研究』 一九七二年
 - 8 国立国語研究所資料集⁷ 『動詞・形容詞問題語用例集』 一九七一年
 - 9 河野六郎 「文字の本質」 『河野六郎著作集3 文字論・雑纂』 一九八〇年 平凡社
 - 10 国広哲弥 『構造的意味論』 一九六七年 三省堂
 - 11 松村明・森岡健二・阪倉篤義・柴田武司合 『シンボジウム日本語3 日本語の語彙・意味』 一九七五年 学生社
 - 12 ——— 『シンボジウム日本語4 日本語の文字』 一九七五年 学生社
 - 13 森岡健二 「漢字の層別」 上智大学文学部紀要分冊『国文学論集』七号 一九七三年
 - 14 水谷静夫 「同音異義語」『言語生活』八一号 一九五八年
 - 15 ——— 「漢字音の組合せによる同音語」『言語生活』一六九号 一九六五年
 - 16 Osgood, Suci, and Tannenbaum. *Measurement of Meaning*. 1967 Urbana, University of Illinois Press
 - 17 SUZUKI, Takao. 'A Semantic Analysis of Presentday Japanese, with Particular Reference to the Role of Chinese Characters' 1963 Keio University
 - 18 鈴木孝夫 『ことばの人間学』 一九七八年 新潮社
 - 19 武部良明 『漢字の用法』 一九七六年 角川書店
 - 20 ——— 『日本語の表記』 一九七九年 角川書店
 - 21 田中章夫 「同音語をめぐって」『国語学』五三号 一九六三年
 - 22 ウルマン(池上嘉彦訳) 『言語と意味』 一九六九年 大修館
 - 23 読売新聞社会部編 『日本語の現場・第一集』 一九七六年 読売新聞社
- 付記 本稿の過程で林四郎先生から御助言を頂いた。深く感謝申し上げます。
- (筑波大学大学院博士課程応用言語学)